

第2版はしがき

2020年は、貿易戦争、経済連携・投資紛争といった国際経済法に関わるさまざまな側面において、波乱の幕開けとなった。

まず、国別の動向としては、2017年に発足した米国トランプ政権が保護主義的な通商措置を多用していることや、英国が欧州連合（EU）から離脱したことや、中国が一带一路（BRI）政策を推し進めていること等が挙げられる。これらをどのように法的に評価できるかに関心を持った方も多いのではないだろうか。また、地域的な動向としては、米国による環太平洋パートナーシップ（TPP）離脱後に成立したミニ TPP（TPP11ないし TPP 協定）や、日本と EU の間で合意した経済連携協定（EPA）、そして自由貿易協定（FTA）に該当するか否かについて議論のある日米貿易協定が、いずれも発効した。これらが、特に日本経済にどのような影響を及ぼすのかについても、注目が集まっている。さらに、世界的な動向としては、WTO 紛争処理手続の機能不全が2019年12月に現実のものとなった。これは WTO 体制全体について、深刻な懸念事項となっている。

こうした動向の多くについては、関連する国際ルールの限界や課題を露呈するものだと受け止められることが多い。だからといって既存の国際ルールが全て無意味だというわけではない。なぜなら、既存の国際ルールに全く規定が無い場合どうしようもないという場合は多くないからである。主要な法的紛争の多くは、国際ルールにおける基本原則が、種々の例外規則によってどのように制約されるかが争われているのである。それゆえ、そもそも国際ルールの基本原則が何であるか、そしてどのような例外規則があり、どのように運用されているかについて、バランスよく理解することがますます重要になるといってよい。

第2版でも、このような観点からアップデートを行った。引き続き、舟木さんの多大なご労苦に感謝申し上げます。

2020年1月

執筆者を代表して

小林友彦

初版はしがき

本書は、グローバル経済のルールについての入門書である。自由貿易に関連するルールの原則と例外を対置したり、全世界的なルールである世界貿易機関(WTO)と部分的なルールである自由貿易協定(FTA)を対置したりすることで、めりはりのある構成とした。書名を「国際経済法入門」などとしなかったのは、このような理由からである。その一方で、貿易分野だけでなく、投資の保護や知的財産権の保護、環境の保護や持続可能な開発といった隣接分野の問題についても、初学者を混乱させないように配慮しながら目配りした。

どのように呼ぶかはさておき、本書が対象としたのは、新しく、動きのある法分野である。そして、多くの人の生活や職業に関係するという意味で、実務的にも大きな関心と呼ぶ法分野の1つである。たとえば環太平洋パートナーシップ(TPP)をめぐる報道が注目を集めたのも、それが農業、工業、サービスの全般に大きな影響を及ぼしうるからであろう。こうした重要性を反映して、専門的な論点を扱う研究書だけでなく、概説書や教科書も、すでに数多く刊行されている。

ただし、これまでの概説書・教科書は、法学部の3～4年生や大学院生を读者として想定した、大部かつ詳細なものが多い。そのため、法学部以外の学部の学生や社会人、また法学部生であっても1～2年生の学生にとっては敷居が高く、よほど真剣に勉強しようという気がない限り、その全体像を簡潔に把握するのは容易ではなかった。そこで本書は、法学を学んだことがなくとも理解できるように入門的な教科書を目指した。全ての論点を網羅することは諦め、その代わりに基礎的な事項を丁寧に解説することに努めた。

4人の共著者は、問題意識も研究方法も異なるが、国際経済法に対する理解を広めるためには、より読みやすい入門書が必要であるという考えで一致した。共著という性格上、文体の不一致や、完全に明確ではない部分があるかもしれない。逆に、単著とは異なり、共著であるがゆえに多様な視点を反映でき

たようにも思われる。その評価は読者に委ねるが、本書を通読した後に、さらに詳しく調べたいと思ったり、より専門的な研究成果に触れたいと思ったりしてもらえたならば、本書の目的は達成できたことになる。

最後に謝辞を述べたい。出版事情が大変に厳しい今日、法律文化社の舟木さんの温かいご支援がなければ本書の刊行はありえなかった。執筆者間の議論が熱くなって作業が滞ったときでも、常に冷静に励まし続けてくれた。あらためて謝意を表したい。また、入門書という性質上、巻末の限られた参考文献を除いて先行研究を示していない。しかし、本書はいうまでもなく、日本、そして世界の国際経済法研究の豊かな土台のうえに成り立っている。全ての研究者に御礼申し上げる。

2015年10月

執筆者を代表して

小林友彦